

長崎自然共生フォーラム News Letter

春季号 (第10号) 2011年3月25日 発行

論説に代えて —

“森林生態系と森の恵み” コロ キウムから

事務局

去る22年11月22日(月)長崎大学環境科学部(342教室)で、森林総合研究所北海道支所・東北支所合同の研究発表があった。長崎大学吉田准教授(環境計画学)の司会で行われたが、生態系サービスについて冷温帯の事情を知ることが、暖温帯に住む我々にとって環境認識のきっかけをつくってくれる。その概要を記す。

○ 東北地方のキノコ狩の生態系とサービス評価の試み(松浦)

ワラビ・ウド・ゼンマイ山菜3種について、1/25000の植生図を用い2項ロジスティック回帰による生育分布の推定を行った。ワラビは沢沿いで生育が異なり、林道の存在が重要なことがわかった。今後、林業以外の森林利用、特用林産物の持続的利用が望まれる。(毒キノコなどの経験則はどうするなどの質問があった)

○ 北海道における山菜狩と生態系サービス(高橋)

タケノコ(チシマザサ)・フキ・ワラビ・ゼンマイ・ネマガリダケなど山菜の季節性、劣化性、地場消費について調べた。また山菜狩りに関する遭難の件数・人数は、登山中の70%と異なり20%だった。(リスク管理の方法を見つけ、モデル化が重要との指摘があった。)

○ 里山林の植物多様性に関する森林生態サービスの総合評価(島田)

コナラ・クヌギ・ヤマボウシ林で年1回の落葉掻きを中断すると種数変化の現象が起こる。管理履歴と階層調査の結果、1区当たり40種という種多様性の道筋と管理形態の分化(伝統的管理・非伝統的管理・間伐的管理・単発的管理)が明らかとなった。年1~2回の下刈でいいのか、継続的管理・無中断の期間管理・対象地の履歴と植生など林床管理は重要であり、除伐の前に慎重な態度が必要である。(管理形態別のボランティア管理方法、コナラ二次林と常緑樹二

次林の管理状況の違いなどの質問があった。)

○ 多摩地方におけるコナラ・クヌギ二次林の群落構造と種数管理(原崎)

林床草本の個体群調査からの寿命推定:クルマバハグマ(個体変化が少ない)、の長期モニタリングによると地下茎は1節/年成長し、ロジスティック回帰で葉面積は物質生産能力と相似する。個体群のサイズ構造からサイズクラス別生残率で平均寿命の成長曲線を描くと拡大・縮小現象を示した。開花可能サイズは拡大成長しており、いわゆる“花の命”は永いことがわかった。ブナ帯の林床環境は比較的安定し、低資源に適応した生活史を送れることを意味する。(拡大・縮小現象の空間的特徴は?などの質問があった。)

○ 奄美大島における野生生物の生息状況の変化:生態系サービスの視点から(杉村)

ニホンミツバチは森林面積が大きいほど集まりやすい。森林生態系においては、相互関係の解析を行い、人と森林(ブナ林・落葉広葉樹林・常緑広葉樹林・マングローブ林)との関わりにおいて、環境の調整サービスが行われていることを知らなければならない。とくに希少種・絶滅危惧種の生態系サービスについてである。森林はいかに利用されるべきか?文化的サービス・供給サービス・調整サービスのなかで、生活サービスについてはレベル別に速度変化を数値ししなければならない。奄美大島にはアマミノクロウサギ・トゲネズミ・クマネズミ・リュウキュウイノシシ・オオトラツグミ・アマミヤマシギなど希少種が生息するが、これらの生息頻度・生息環境の変化を追跡しなければならない。森林面積は減少しているが、それはシイ堅果の減少に由来する。マングースの駆除はアマミノクロウサギなど希少種を変化させ、森林の回復に寄与する。その意味で国立公園は生態系サービスの保護地域といえる。(対策コストをどう対処するのかなどの質問があった。)

(九州西部では炭焼きも廃れ、休養リクリエーション・ワラビ摘みぐらしか森林利用が日常的にないが、本来、生態系サービスを享受できる、森林生態系の保護・保全・再生をどうするかを考えさせられた。川里弘孝)

平成22年度(社)日本造園学会九州支部熊本大会開かれる！ ～大会テーマ：都市の品格と造園まちづくり～

事務局

去る22年11月27日(土)、熊本市の崇城大学情報学部で開催された。恒例の研究・事例報告のほか、市民講座(クリスマスツリーづくり・ミニ門松づくり)、基調講演・パネルディスカッション・パネル発表・エクスカッションなどが催された。(社)日本造園学会・九州支部、全国都市公園整備促進協議会が共催し、国土交通省・環境省・熊本県・熊本市・熊本県立大学・崇城大学・(社)日本都市計画学会が後援している。

基調講演は、蓑茂寿太郎氏(熊本県立大学理事長)が「ランドスケープ遺産と地域づくり～九州での可能性はいかに～」と題して、建築学会・土木学会の各支部と軸を一つにして「ランドスケープ遺産」をリストアップし、地域の「庭」として資産化、地域の再生を図りたいとの提案があった。(ヨーロッパ庭園・中国庭園・日本庭園の流れをくんだ日本の造園家は、東アジア共同体運動への指導者足りうるかとの印象を受けた)

パネルディスカッションは、蓑茂氏をコーディネーターに天本徳浩氏(崇城大学エコデザイン学科准教授)・包清博之氏(九州大学大学院芸術工学院教授)・神田修二氏(環境省九州環境事務所長)・田畑正敏氏(国営海の中道公園事務所長)・永松義博氏(南九州大学環境園芸学科教授)ら5人のパネリストで、「九州のランドスケープ遺産と地域づくり」のテーマで、造園がもつ歴史性・自然性・文化性についてそれぞれの立場での意見が述べられた。フロアとの質疑応答も活発にあった。一応、建築物は50年との基準があるが、造園物は復元の具体性も含めてこれから論議しなくてはならない、ランドスケープ遺産は単体が総体か、技術(人的遺産)をどう考えるか、などの意見があった。(風景遺産も順次検討されるとのことであるが、まずはリスト登録に応募・協力が先決と思った。川里弘孝)

三学会長崎県地区合同例会が行われました～植物学会・動物学会・生態学会～

事務局

年1回ではありますが、去る12月4日(土)13時から長崎大学医学部(基礎棟2階)で、会員ほか10名余と聴講者(学生10名余)の集まりがありました。話題提供(研究発表)は植物・生態学会の3件、動物学会の3件でした。終了後、世話人の小路(こうじ)武彦教授(組織細胞生物学・

長崎大学副学長)はじめ学者・研究者の茶話会は弾み、お暇した時は夕闇に包まれていました(川里弘孝)。

“いきものつながりアート展：海と山のはざま”開かれる！！

事務局

国際生物多様性年を記念して、(財)日本野鳥の会・長崎県共催のアート展が、11月27日(土)から12月6日(月)まで県立美術館2階ホールで開かれた。

東京会場(10月、11月)に引き続いて行われたもので、6人のアーティストによる絵画・ぬいぐるみ・バードカービング・写真・フィギュア・ステンドグラスの芸術作品展である。それぞれのアーティストが自然や生き物のすばらしさを独自の感覚でとらえて作品化している。いずれもすばらしく甲乙つけ難いが、筆者としては松村しのぶ氏のフィギュア(立体模型)：カワウソが印象的だった。簡単に作者からのメッセージを記す。

○大田黒摩利(絵画)：「川から地球が見えてくる」という環境絵本を中心に、身の回りの生きものを描いた。都会の川でも豊かな自然があることを感じていただければ幸い。

○落合けいこ(ぬいぐるみ)：いきものが生きてゆくために、とても大切なものは「はざま」。ずっとそこにそのままの形でいてほしい、つれづれ思いながらいきものたちを作ってみた。

○鈴木 勉(バードカービング)：鳥の奥深い知識とつくる楽しみを同時に得る、血の通ったぬくもりを感じるような作品をつくりたい。

○中川雄三(写真)：動物写真は自然界の通訳だという自負で、脚光を浴びることの少ない底辺の動物たちにスポットをあてることが使命だと考え、ライフワークとしています。

○松村しのぶ(フィギュア)：生き物の世界には、「楽しいものと理不尽なもの」が渾然一体となった中にモチーフが埋まっている。それらを掘り起して「カタチ」にしてゆくことが、野外で動物と出会う「カン」を磨きながら彼らを知る最高の方法だと思っている。

○山村日和(ステンドグラス)：自然界に生きる生物たちの色彩に感動しており、たくさんの美しいガラスを使って、自然のすばらしさを少しでも伝えられるような作品をつくりたい。

ミステリーツアーで山陽から伊予へ！

事務局

昨年は休止された、同好の士の集まりのミステリーツアーが、今年、再開されました。今回は、老若男女19人で歴

史・文化中心の旅で9月18日(土)から20日(月)にかけて、山口・広島・愛媛を廻りました(二泊三日)。

第一日目は、まず山口市の瑠璃光寺：五重の塔(国宝)・毛利家墓群でした。法隆寺・醍醐寺と並んで「日本三名塔」の一つで、塔屋は改修中でしたが、心柱構造と檜皮葺はよく観察できました。風致的には、「うぐいす張りの石畳」がある松林に囲まれた毛利家墓群周辺が静かでよかったですと思います。周遊者がいなかったせいかも知れません。次ぎの岩国市の錦帯橋(国宝)も観光客で賑わっていました。ロープウェイで登った岩国城は、天守閣周辺の空堀径の雰囲気もよく、壮大な眺めでした。清流豊かな錦帯橋と緑濃き岩国城とのコラボのアングルはいい被写体となりました。18時過ぎ、広島駅前に到着しました(東横イン泊)。

第二日は、江田島市と呉市、それから四国に渡って大三島市の見聞でした。江田島までは呉港からフェリーで40分。晴天で、湾内の島々とカキ筏のコントラストが美しいと感じました。切口港上陸後、雑木林やミカン畑の丘陵地を越えて、海上自衛隊基地へ。ここには第1術科学校・幹部候補生学校などが置かれています。10時からの見学時間まで、休憩所でビデオやトイレ、土産物ひやかしなどで待機しました。若い2等海曹の案内で基地内を巡りました。資料館見学後、旧海軍時代から残る遺構、大理石で造られた大講堂、赤レンガ造りの旧士官学校舎など見ました。ここではドラマ「坂の上の雲」も撮影されたとか。広大な基地内の見学区域には旧特殊潜航艇の野外展示もあり、一帯はマツの大木に合わせて白砂によってきれいに整備され、家族連れ・グループ連れ・団体、多くの見学者がありました。陸路、呉市に戻り、大和ミュージアムへ向かいました。昼食場所はどこも満員で席が取れず、各自でうどんなどを賞味後は1時間の自由行動でした。多くの戦艦大和関係の資料が展示され、館内は混雑しており、廻り方にもよりますが、興味を持つ人は1日がかりの見学地だなどの印象を受けました。その後は、うみなみハイウェイを経て四国入り。大三島市の大山祇神社・国宝館・海事博物館を見学しました。大山祇神社は、長崎・対馬の海神社と同じ格式が高い神社で、天然記念物の大楠は長崎・諫早の方が幹周りは大きかったようです。海事博物館には昭和天皇ゆかりの研究成果や御用調査船などが展示されていました。不謹慎ですが、昭和天皇は本物の学者だったとの想いを受けました。松山市内に到着した時は日が暮れていました(ホテル松山泊)。

第三日は、早起きグループは道後温泉へ。相変わらず浴衣姿の沢山の人が入場を待っていました。6時の太鼓と共に入浴した後、個人的に近くの湯神社へ。境内のイチイガシの大木が印象的でした。7時のからくり時計を待ちましたが、8時に変更とのことで見られませんでした。8時40分発で午前は砥部焼の里へ。砥部焼伝統産業会館を見学後、個人的に三人で老舗の窯元：梅山窯(梅野精陶所)へ行きました。途中、道を尋ねた人が親切に車で送ってくれました。昼食は大洲市の郷土料理・鮎料理で舌鼓を打ち、ほろ酔い

加減で二艘分乗の肘川(ひじがわ)ライン下りを楽しみました。大洲城・臥龍山荘を眺めながらの川下りは楽しく、ガイドの喋り上手が良かったようです。昼食場所の「なかとら」屋さんの2階からの肘川の鶴飼い見物が抜群との自慢がありました。下船後、「おはなはん通り」を散策し、まちの駅「あさもや」で買い物をしました。佐多岬の直前、三崎港で伊予の国とお別れし、フェリーで佐賀の関に上陸したのは16時40分でした。途中、キャビン内で車座反省会を開き、旅の締めくくりをしました。長崎では順次解散で、長崎駅に降りたのは20時50分でした。いつも楽しい旅を計画し、実行する幹事の方々、それに安全運行のベテランツアードライバーに感謝します。(川里弘孝)

セイタカアワダチソウ抜き取り作業終了しました。感謝!

事務局

平成22年度県費補助の作業は、おかげさまで無事終了することが出来ました。第1回は8月4日(水)に「とりかぶと自然学校」の協力を得て、2回目は9月5日(日)に会員で、3回目以降は9月6日(月)と10月2日(日)から15日(水)の間に、加えて18日(月)から27日(水)にかけて、会員の奉仕と「とりかぶと生活科学研究所」の協力で行いました。協力いただいた各位に心から感謝いたします。ありがとうございました。

1回目は、「とりかぶと自然学校」研修生が5~6人ずつ3班に分かれ、市道南川内線沿線のセイタカアワダチソウの抜き取り作業を行いました。各班にはシニアリーダー(スタッフ)が付き、安全管理に努めました。作業地には甲虫・蝶なども多く、植物名に興味を示す子もいて野外教室的な雰囲気の中、無事、終了しました。川側テラスでのそうめんとおにぎりはとびきり美味かったです。吉川さん、ありがとうございました。

2回目は、会員への呼びかけで行いましたが、期日間際の電話確認では皆さん行事が多く参加出来ないとのことで少人数でした。「とりかぶと生活科学研究所」のお二人にも手伝って貰いました。「とりかぶと村」・植物工場での昼食会は、道路晋請だった南川内婦人部の方々も加わって賑やかに楽しく過ごしました。ご多忙の折、当日、督励いただいた宮原会長、佐世保から駆けつけてくれた来崎さん、研究所の三原さんと遠谷さん、ありがとうございました。お疲れ様でした。樹々を眺めながらせせらぎの音を聞く、露天風呂での汗流しは最高でした。なお、2回目には自然学校の浅田さん、地元の石丸さんのお手伝いもいただきました。厚くお礼申し上げます。(3回目以降は、三原さん、遠谷さんと赤川さんの3人で行い、仕上げと点検は菅・川里が行いました。)

とりかぶと村で収穫祭とジャムセッション開かれる！

事務局

昨年10月16日(土)恒例の収穫祭と、11月19日(土)第3回ジャムセッションが開かれた。収穫祭はとりかぶと村主催、自然学校での芋煮会とコンサートがメインで、およそ50人余が参加した。天候晴れで野外でのゴザ敷きとベンチでのアルコール、演奏を楽しんだり静かに雑談したりで時は流れ、若者たちとの交歓は早めに切り上げたつもりが深夜をまわっていた。

ジャムセッションは快晴に恵まれて夜を徹して賑やかに開かれた。こちらは有料で中央ドームさらに宇宙船棟を中心に、全村貸しきりで午後から夕方にかけて関東・関西・九州のミュージシャン・若者が車で80人近く集まった。夜通しで風呂焚きのお手伝いをさせて貰ったが、夜明け近く入浴者が増え、湯上りパンチ族との会話が楽しかった。しっかりした考えを持つ若者たちで、なかには風呂焚きジイサンへお酒と煮込みを差入れてくれたお嬢さんもいて、いわゆるパンチ族への偏見を痛く恥じた。まだまだ日本は沈没しない！(朝早くおいとまして多良岳登山したが、さすがにバテバテ、途中でリタイアした。)

談話室 —

水バテ、シャリバテ、気持バテ

川里弘孝

去る22年1月23日(土)午後から、JAC(日本山岳会)・福岡支部の新年会改め“岳人のつどい”が福岡・天神であった。

講演と懇親会のセットで一般にも開放され、「山でバテない体力と心構え」と題した、斉藤篤司九大准教授の理論的登山学だった。運動生理学を知らずして山は登るな、山を楽しむために“水バテ、シャリバテ、気持バテ”の予防についてのお話が面白かった。

そこでふと考えた。組織運営も一つの山登りに例えると、“水バテ、シャリバテ、気持バテ”の現象に陥る危険性はないかと。今、わが自然共生フォーラムはそのような危険な状態にありはしないか？ 会員減少、マンネリ化、会員間の会話不足、まさしくバテバテ現象ではないか！ 継続は力なりと10年間過ごしてきたが、全く進歩がない。

旧態依然では維新は始まらない。そのための事務局ではないかとの思いはする。しかし個人・単体では運用限界もあり、ことに事業を担当してみると他者・他団体との連携の大事さが身にしみる。“とりかぶと村”・新農の家の「互恵構造」ではないが、お互い自分の出来る範囲で役割分担する、これが持続可能な組織づくりではないかと感じた。懇親会でのアルコールもいつになく進み、有意義な一日だった。

交流広場 —

ゴミ捨て・ゴミ拾いも1/3理論の適用か？

H氏〜投稿・匿名希望

先般、某テレビで元日本医師会会長であった故武見太郎氏が言った言葉として、「医者のうち1/3は自分から勉強する、1/3は言われれば勉強する、残り1/3はどうしようもない、それも開業医に多い」との紹介があった。そのことは、政治家をはじめとして今の社会を正直に皮肉っている捉え方として、共感を覚える。翻ってゴミ捨て・ゴミ拾いの世界も同じことが言えないか。「1/3の人は自分からゴミを捨てない、1/3は言われれば捨てない、1/3はゴミを捨てる。」し、「1/3の人は自分からゴミを拾う、1/3の人は言われれば拾う、残り1/3は拾うこともしない」のである。両者はそれぞれ比例も反比例もし、「1/3の人が自分からゴミを捨てず、自分からゴミを拾う」とは限らない。様々な人がいるということは多様性が豊かであると言えそうだが、ゴミの世界はそうではないと思う。1/3のどうしようもない人をどうするか、社会の仕組みをどうするか、人間の性善説は本当だろうか？ 懐疑的になるこの頃である。

談話室 —

ecoji (エコ爺)の the twitter (さえずり)

投稿 匿名希望

趣味で始めたゴミ拾いと川清掃も5年が過ぎた。街中のゴミは激減したものの、吸殻のポイ捨ては一向に減らない。犬連れ人の川への糞捨ては少なくなったが、上流からのビニール類の流れ着く。河床のヨシ原での拾いは骨だが、河岸をジョギングする人、散歩する人が増えたことに心癒される。

個人的なので他のグループと連携はしない。マネージメントにエネルギーを使うより、無言の連携が好ましい。たとえば河岸に花を植える人、落ち葉を集める人、流入路(溝)を掃除する人、それぞれが自分のできることをして時折拾ったゴミを置いていってくれる。暗黙の互恵関係だ、これも持続性を保つ秘訣だと思ったりする。

河岸の草刈りは兩岸の自治会が補助を貰ってやっているが、ただ機械刈りするだけ。河床のヨシ原にはゴミが一杯引掛かっているのにも思う。しかし川への生き物の復活は目まぐるしい。春はチョウ類、夏はトンボ類、秋は名も知らぬ草花類、冬はセキレイ・カモ類、フナ・チュウサギ・アオサギは年中、見られる。

釣りする少年、網を持った幼児・児童が駆け巡る、昔、泳いだ川の風貌は変わったが、子供たちが水・岸辺に集う風景に戻ることは嬉しい。願わくばゴミを拾いながらジョギング・散歩する人が増えるといい。

ブックガイド

- 「里」という思想 (内山 節) 新潮選書. 218pp. 哲学者のエッセイ集である。身近な話題を取り上げて易しく短く書かれているが、筆者のような浅薄な頭ではなかなか読み取れない。しかし、中身は奥深く含蓄があり、日本人の自然共生の思想あるいは哲学の根源を突いている。「里」とはLocalの意味である。
- 裸はいつから恥ずかしくなったか～日本人の羞恥心 (中野 明) 新潮選書. 244pp. 150年前、ペルー来航時の下田での「混浴図」は欧米人にある種の「日本人観」を植え付けた。昭和30年代後半東北の温泉で体験した、「混浴」風習はまだ残っているのだろうか？執筆者は日本人の裸体観が欧米人によって次第に変えさせられたことを言いたかったのではないだろうか、との思いを馳せた。
- 生物多様性とは何か (井田徹治) 岩波新書. 224pp. 世界中を取材した共同通信社の記者が、今の地球と人類の命題である「生物多様性」の保全に切り込んでいる。当然ながら取り上げている話題はわれわれの日常生活の事柄のすべてにわたっている。かつての石 弘之氏 (朝日新聞記者)「地球への警告」の再来を思わせる。
- Green Letter No.32 (公益信託富士フィルム・グリーンファンド): 年1回の発行であるが、今年の特集は「森に聞く」である。“アファンの森”の創始者のC・Bニコル氏とTV番組“アファンの森の物語の全編の語り”を「マザーツリー」として担当した八千草薫さんとのグリーンレター対談をはじめ、哲学者、民俗学研究者、ジャーナリスト、神宮禰宜、ボランティアがそれぞれ含蓄ある短文を寄せており、編集長 (元長崎県課長) の「山の神」: 御杣始祭 (みそまはじめさい) の記事もすぐれる。
- 自然はそんなにヤワじゃない (花里孝幸) 新潮新書 75pp.
- 分かりやすい生物多様性 (香坂 玲) 中京新書 235pp.
- 生物多様性を守るためのアピール (エドワード.o.ウィルソン 岩由二 訳)

事務局だより

- 退会・・・大塚正則: 琴花園 (H22年12月12日付け)
- 広告協賛料の設定を考えました。A4 全頁(4000円)、A4 半頁(2000円)、A41/4頁(1000円)、名刺大(500円) ご賛同ください。
- 23年度の幹事会を4月に開きたいと思います。後日、ご連絡します。
- 削除会員が増え会の会計が逼迫しています。会費納入、広告掲載にご協力ください。

編集後記

東日本大震災の被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。早いもので当フォーラムも発足して10年が過ぎ、11年目を迎えようとしています。各位にとって”飛躍”の年になるよう、切に願っております。編集局も新たに校正担当を加え(来崎会員が快諾してくれました)、ニュースレターをはじめ各活動の充実を図りたいと思っております。各位のご協力・投稿を心からお待ち申し上げます(K)。

なお、編集計画の甘さで発行が大幅に遅れたこととお詫び申し上げます。会長は超多忙のため、年頭所感の原稿が間に合いませんでした。次号以降をご期待下さい。

【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。最低1,000～1,200字程度でお願いします。二段組みはこちらでやります。E-mailでの投稿、大歓迎です。(M)

(nagasaki_coexistence@hotmail.com)

事務局	会長 宮原和明 〒850-0036 長崎市五島町3-3-206 NPO環境カウンセリング協会長崎内 TEL: 095-818-3305/FAX: 095-826-3693 枚: 090-7161-5408 E-mail: Nagasaki_coexistence@hotmail.com
アネックス1	事務局長 川里弘孝 〒856-0824 大村市水田町1098 (長崎大学大学院生産科学研究科) TEL: 0957-50-1355 FAX: 0957-50-1355
アネックス2	副事務局長 為永一夫 (県央地区担当) 〒856-0820 大村市協和町790 (株)タメナガ造園 TEL: 0957-54-0271 FAX: 0957-54-1127
アネックス3	副事務局長 松田英明 (県南地区担当) 〒851-2212 長崎市畝刈町1613-251 (株)松田久花園 TEL: 095-850-0714 FAX: 095-850-0715
アネックス4	副会長 山本規仁 〒857-0103 佐世保市原分町1052-3 山本造園土木 (株) TEL: 0956-49-3939 FAX: 0956-49-4747
アネックス5	副事務局長 田雑豪裕 (県北地区担当) 〒857-1161 佐世保市大塔町574-5 (株)庭建 TEL: 0956-31-2011 FAX: 0956-31-2310

